

センターだより

第40号

平成28年3月18日 発行

Aomori Prefectural School Education Center
青森県総合学校教育センター

〒030-0123 青森市大字大矢沢字野田80-2
☎017-764-1997 FAX017-728-6351

お礼の言葉

『エミール』

副所長の三戸です。今年度の最後のセンターだよりになりますが、ジャン・ジャック・ルソーを取り上げたいと思います。私の中のルソーは高校時代の世界史の時間にフランス革命とともに教科書に登場する18世紀中葉の哲学者でした。大学の教育原理で『エミール』の存在を知ることになるのですが、人物と著作は単なる知識としての理解に留まっていた。大学を卒業し、私にも教壇に立つ日が訪れるのですが、黒板を背にひたすら目の前の生徒のことに全力疾走という教師生活を送り、その後教育行政に携わった時代にあっても『エミール』を紐解くことはありませんでした。

現在の職に就き、ある本をきっかけに『エミール』を読む機会を得ました。ルソーは語ります。「私たちは、子どもの位置に自分を置いてみるのがいつもできないでいる。彼らの考えに入り込むことをしないで私たちの考えを彼らの考えとしている。私たちはつねに私たちの自身の論理に従いながら、真理の連鎖によって、実は不条理と誤謬を子どもの頭に詰め込んでいるにすぎないのである。」(第三篇「自然関係の学習子ども自身による学習」から)

ルソー自身の言によれば、『エミール』を書くために20年の思索と三年間の執筆期間を費やしたと言います。すなわち思索は1740年のマブリ家で家庭教師をした時から、執筆は1756年エルミターージュに移り住む頃からのこととなります。その頃、独立の機運が高まるアメリカではベンジャミン・フランクリンが雷は電気であることを明らかにした実験を行い、日本においては鎖国の続く江戸時代後期にあたり、遠く異国で起こっている産業革命の足音が少しずつ聞こえ始めていた頃であったと推測できます。

教育の変遷を辿ると「不易」の流れは、時折「流行」と合流します。ルソーのいう「子どもの位置に自分を置く」とはまさに現代の日本の教育における、学習者である子どもを中心としたアクティブ・ラーニングの思想に重なるものです。今、その歳月を俯瞰してみたとき、学びの本質は普遍であることと同時に、人が人に伝えるという教育という業の難しさと奥深さに思いが至ります。

教育基本法第九条にうたわれている、教員の「研究」と「修養」をどのように自らの仕事に体现させるか、特に「修養」は難しいと思います。「修養」は当事者としての己の意識に委ねられるものだからです。意識の起点を自己に置くか、相手に置くか。私に関して言えばルソーとの出会いは、己の経験という名のもとに過去を生徒に押しつけていなかったか、親が我が子の行く末を見守るように真に生徒の未来のためにという発想はあったか、深く振り返ることにつながりました。

学校は日々忙しく、学校のみならずあらゆる職業で多忙感はつきまといます。高度情報化社会は生活の利便性を格段に向上させましたが、副作用も当然あります。総合学校教育センターでは様々な研修を行っていますが、研修をとおして同志から刺激を受けることや、一方では静かに過去の自分と向き合うことで新たな自己との邂逅が生まれることもあろうかと思えます。たしかに、激流を漕ぎ渡る日常から抜け出すには躊躇を伴います。しかし、時に湖に小舟を浮かべるとく明鏡止水の境地に立つことも教師という仕事には必要ではないでしょうか。

年度初めに当誌上で「子どもの変容は教師の変容なくしてあり得ず、教師の変容は研修によってのみ実現できる」ことを所長が申し述べましたが、今一度その言葉を教師である皆さんに捧げ、今年度のお礼の言葉に替えたいと思います。

(県総合学校教育センター 副所長 三戸延聖)

学校現場で活用できる研究成果をモットーに日々研究に励んでいます！

一年目研究員の研究紹介②

菊池真樹子研究員

(義務教育課 原籍校:八戸市立長者中学校)



研究主題

説明的な文章の「読むこと」の学習において、論の組み立てを捉え、自分の意見を形成することのできる生徒の育成

－ 文章のポスター化を通して －

研究に向けて

どうしても、ワンパターンな学習になりがちな説明的な文章の授業を、生徒が主体的に読む活動に変えられないかと考えて研究しています。

内容の読み取りで終わらずに、表現の工夫にも目を向けて説明文を読む力を生徒に付けさせたいと考えています。

研究内容

文章の内容を付箋を使って構造化し、さらに、筆者が自分の言いたいことを伝えるための工夫を見つけて書き加えていく活動を「ポスター化」と呼ぶことにしました。

ポスター化することが、文章を深く読み取り、さらに自分の考えを表現する力を付けることにつながるか検証していきます。

佐藤大志研究員

(義務教育課 原籍校:田舎館村立田舎館中学校)



研究主題

中学校社会科歴史的分野において、社会参画の資質や能力の基礎を培う指導法の研究

－身近な地域の歴史を調べる活動において、歴史と自分との関わりを考える学習活動を通して－

研究に向けて

小・中学校社会科の究極の目標は、「社会参画の資質や能力の基礎」を含む公民的資質の基礎を養うことですが、調査結果から、社会参画の意識が低く、歴史の学習が役に立たないと感じている中学生が多い状況が浮かび上がってきました。このような状況を改善する方策を考える必要があると考え、主題を設定しました。

研究内容

「社会参画の資質や能力の基礎」を培っていくためには、歴史で学んだことを実際の社会の発展に活かす場面を設ける必要があるのではないかと考えています。特に、生徒が具体性と親近感を持ちやすい「身近な地域の歴史」について、当時の人々の考えや思いを想像した上で、歴史的事象との関わり方を見出し、歴史と自分との関わりを考える学習活動の効果について考えていきたいと思ひます。

尾形克幸研究員

(特別支援教育課 原籍校:田子町立田子小学校)



研究主題

通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童の行動に着目したケース会議が、気になる行動を望ましい行動に変えるための支援を導き出す効果

研究に向けて

児童の気になる行動の原因やきっかけを検討し、望ましい行動に変えるための明確な支援を効率よく導き出すケース会議を考えています。指導者にとって行って良かったと思えるケース会議にしたいと思ひます。

研究内容

- ・具体的な支援を効率よく検討するケース会議のマニュアルの作成
- ・マニュアルに基づいたケース会議の実施
- ・望ましい行動に変えるための支援が検討されたかを検証